ブリンクリー先生の遺影

佐瀬順夫

先生は英国的なよさと、日本的な美しさをあわせもたれためずらしい存在であられた。輪廓のととのった面もちで、にこやかに、英国風のあみあげのブーツをはかれ、白髪の長身でさっそうと風を切るように谷山ケ丘をのぼり下りされた。

きもちよくはぎれのよいキングズ・イングリッシュ、それと同じ程度に、またはそれ以上に流暢な日本語――その生粋な東京弁に、北海道なまりの田舎弁である私などは全たく面くらう程であった。

菜食主義の信念をおもちになった先生は、授業が夜にかかる時などは、奥様御手製のサンドウイッチをおもちになり、研究室などで渋茶をすすりながら、お父上のこと、第一次大戦従軍のこと、また古きよき日の東京のことなど、お話はつきるところを知らなかった。

先生の学生に対する御態度は、慈父のそれであった。教室での御授業のほかに、進んでＩＢＩ（国際仏教研究所）、またＥＳＳの集まりに御出席になり、熱心な御指導を頂いた。あやしげな作文をもってくる学生たちにも、いやなお顔一

つ見せず、懇切ていねいに御指導に当って居られた。

先頃お加減が悪くなられ、お休みになったが、さほど重篤とは考えられず、またわりあいに御元気な御様子なので、しばらく御休養なさったら、遠からずまたいつも通り御出校頂けるものと信じ切っていた。

八月二十一日、お亡くなりになったとの知らせを突然学校で聞き、呆然とした。とりあえず菅谷学部長、粕谷学務部長と逗子のお宅にかけつけた。先生御自身の御設計になるという和洋折衷の書斉のベッドに先生は永遠におやすみなって居られた。机の上には御勉強中の書物がそのままおかれてあった。

奥様のお話では、おやすみになって居りながら、よく立正大学にお通いになる道順を、うわごとのようにお話になっていらしたとのこと。また教壇でたおれるのが本望であるということもおっしゃって居られたという。あくまで責任感の強い先生であられた。

秋雨のふりしきる今日九月二十四日、築地本願寺で、しめやかに、またおごそかに、御本葬がとり行われた。百通にあまる弔電、またひきもきらぬ弔問のひとびとの列にも、先生の御徳のほどがしのばれた。親しく御指導を頂いた学生たちもいろいろ御手伝いをし、最後のおわかれを申し上げた。その後御遺骨は青山墓地におやすみになる御両親のおそばに葬られた。

もはやあのお姿に、お声に接することが出来ないと思うと、言いようのない空虚さがせまってくる。然し先生のおもかげは谷山ヶ丘から、私共の心から、永遠に消えないことであろう。

心から御冥福をおいのり申し上げる次第である。